

非正規雇用の既婚女性のキャリアアップ

—自分の能力についてどのように認識しているのか—

ZHANG Jiayi

近年、日本の女性労働力のグラフで特徴的な「M字カーブ」は改善されつつある一方、女性の正規雇用の比率を見ると、20代後半でピークを迎えた後に低下している「L字カーブ」の傾向が現れている。これは、女性が出産や育児を経て職場に復帰する際に、非正規雇用に就く傾向が強いことを示している。主婦による「家計補助的」な労働者と見られていた非正規雇用の既婚女性は、低賃金と雇用不安定な環境に置かれやすく、彼女たちのキャリアの形成にかかわる問題もしばしば見過ごされている。たとえば、非正規雇用の女性が能力を持っているにもかかわらず、それが活かされていない可能性がある。本稿では、これらの女性たちのキャリアに焦点を当て、彼女たちが自身の能力をどのように認識しているかを探る。

本稿は、全4章から構成されている。

第一章では、非正規雇用の女性たちを取り巻く状況を説明した。日本では、性別による雇用形態の偏りがあり、それが雇用形態間の賃金差に影響していると言われている。しかし、近年の日本では、非正規雇用の既婚女性が配偶者による扶養に依存する前提が崩れる可能性が出てきた一方、彼女たちの就業に対する意識の変化も見られるようになってきた。そのため、非正規雇用の既婚女性のキャリア形成も重要視されるべき状況になってきている。

第二章では、非正規雇用とキャリアに関連する先行研究を検討した。非正規雇用で働く既婚女性が継続的キャリアを形成しにくい主な理由は、非正規雇用での就労自体がキャリアアップの機会を制限していることにある。また、彼女たちは「家庭」と「キャリア」の間で二者択一を迫られる環境に置かれており、そのため、キャリア形成が相対的にしやすい正規雇用への移行も難しい状況にあるとされている。

第三章では、研究方法及び研究対象を説明した。先行研究で議論された女性の正規雇用化の阻害要因について、非正規雇用の既婚女性自身がそれをどのように捉えているか、さらにそれらの要因がなければ正規雇用で働けるとの認識があるのかを問題意識とし、彼女たちのキャリアアップの道筋を探った。具体的には、半構造化インタビュー調査を通じて、非正規雇用の既婚女性たちが

現職の雇用形態にとどまる理由や、正規雇用労働者との能力の違いを感じているかを検討した。

第四章では、本稿が得た結論を示して、今後の課題を展望した。先行研究で取り上げられた女性の正規雇用化を阻害する要因の中で主なものは、日本的雇用システムにおける正社員の無限定性な働き方である。調査結果からは、無限定性な正社員の働き方が引き起こした「社員の責任が重い」という認識や、治療と仕事の両立が困難であるという現実の環境などが、彼女たちが非正規雇用に残る理由の一部として明らかになった。また、非正規雇用になったとしても、必ずしも正規労働者になれないと思う女性はおらず、むしろ能力的には正規雇用になれるとの考えが決して少なくない。そのため、非正規雇用の能力と貢献を適切に評価するための制度改革が求められている。